

中山科学振興財団
第20回（平成23年度）テーマ

「睡眠の生物科学」

趣意書

ヒトは人生の三分の一を眠って過ごすというが、眠るのはヒトだけではない。ゴキブリも、メダカも、蛙も、亀も、ライオンも、そして小鳥たちも眠る。恐竜たちも眠っていたはずだ。およそ、脳を持つ動物はすべて眠る。このように多くの動物に共通の現象である睡眠は、生物科学における最も重要な研究テーマの一つとして、古今東西多くの研究者をひきつけてきた。しかし、その科学的解析方法が確立したのは、今から半世紀ほど前に過ぎない。

1960年代になり、外見からの観察だけでなく、神経生理学的方法論を取り入れることによって、ヒトや動物の睡眠状態を客観的に解析できるようになった。このような研究方法を取り入れることによって、睡眠には二つの異なった相があり、その一つは夢を見ている状態に対応していることも明らかにされ、睡眠研究は飛躍的に進歩した。また、これに伴って、様々な睡眠障害の病態やその治療法に関する研究も大きくクローズアップされるようになってきている。更に、現代社会における昼夜を問わぬめまぐるしい社会活動の展開は、睡眠のリズムに影響を与え、様々な精神的・身体的問題を惹き起こす。そのため、ヒトの社会活動に対する睡眠の影響も大きな研究テーマとなってきた。

このように、生命の存続において重要な意義を有することが明らかになった「睡眠の生物科学」に関する、優れた研究業績の推薦と、新しい独創的な研究の応募を、大いに期待したい。